

音楽と私

つくばS.E. S.E.あすなる 小泉安治

私が生まれた1939年に第二次世界大戦が勃発し、小さい頃は音楽を習う環境では有りませんでした。父は趣味でバイオリンを弾き、マンドリン、アコーディオン、大正琴等も嗜みました。

子どもの頃 父に内緒で怖々色々な楽器をいじって遊んだものです。

琴似中学に入学。家は田舎でしたが近所に札幌放送管弦楽団のバイオリン奏者が出張してくれる事になり、父から「バイオリンを習わないか」と勧められ、習い始めました。吹奏楽部は有りましたがバイオリンをやる人は私一人で珍しがられ学芸会等で弾かされたものでした。



2)オーケストラとの出会い

札幌西高校に進学。初めてオーケストラを経験。当時の高校は殆んど吹奏楽でしたが西高校は北海道唯一のオーケストラ校で音楽に熱心でした。合唱部も盛んでスメタナの「我が祖国」やヘンデルの「ハレルヤ」等を共演。普通高校ですが先輩は作曲家・東京音大学長、同級生では高校の音楽の先生や芸大の教授、後輩では東フィルのコンマス等結構プロになった人がいます。

北海道大学に進学。部活は迷わず北大交響楽団に入団しました。学内の部活では一番多い予算が計上されていて、コンマスと2ndのトップは数百万円のバイオリンを貸与されています。

京大、東北大、東工大との交歓演奏も経験しました。バイオリンの先生は学芸大特設音楽科講師・北大交響楽団の指揮者に代りボーイン等を本格的に学びました。

当時の大学は「安保反対」、「岸内閣打倒」のデモばかりで、休講が多く、勉強しないで専らオケの部室に入り浸りでバイオリンを弾いていました。先輩は厳しかったですが定演後や夏休みは道内外の演奏旅行での飲み会は無礼講で楽しく、酒も鍛えられました。

大学オケ時代の演奏で今でも忘れられないのは当時画期的と言われた「第九」、そしてSoloは世界一若いと言われた、憧れのN響のコンマス外山滋を招いてのチャイコフスキーの「バイオリン・コンチェルト」が昨日の事のように記憶に残っています。

大学を無事に卒業後ヤマハに就職。仕事は主に楽器の営業で出張や転勤が多く、オーケストラはしばらく中断して社内で弦のアンサンブルにフルートの音大生やピアノの先生に入って貰ったりして合わせたりしました。

3)岡村斉能理事長との出会い

ヤマハに就職して間もなくお互いにバイオリンとお酒が好きで意気投合し50数年の長きに亘りお世話になっています。48才の時ヤマハは鍵盤・管楽器等が中心でしたが初めてバイオリンをやる事になり、弦楽器の初代の担当になりました。

全国の楽器店でバイオリンを展開する為、「弦楽器ビジネス研修マニュアル」を作る事になり、我が国バイオリン界の重鎮日本弦楽器指導者協会・連合会長に「弦楽器のマニュアル」の監修を依頼しました。岡村さんが「この機会に、バイオリンの指導も受けましょう。」と言うことで基礎からやり直しをしました。レッスンは厳しくて「バイオリンを弾いているのでは無く、撫でているだけです。…」と言われショックを受けたものです。

岡村さんのお誘いにより荒川区民交響楽団に入団、ピオラで20数年間在籍、主要なオペラや交響曲ではブルックナーやサンサーンスなど大学では出来なかった多くの名曲を経験しました。メンデルスゾーン「バイオリン・コンチェルト」をN響の篠崎史紀第一コンマスと共演し感激したものです。

4)シニアアンサンブルとの出会い

67才の時つくば・イーアスにヤマハの直営店がオープンし、数年前にヤマハを引退したばかりでしたが勤務を再開することになりました。つくばS.E.を立ち上げる事になり、岡村さんのご指導で、全店を上げて募集した結果、目標の20名をはるかに上回り、説明会に30名集まり、会場が一杯となりました。定年を迎えて時間とお金に余裕あるシニア層がバイオリンなど楽器を始めるのを目の当たりにし、特に茨城県は新しいエリアで将来性がある事を再認識させられました。従来私の音楽はクラシック中心でしたがヤマハのS.E.や船橋S.E.、つくばS.E.そしてS.E.あすなるの慰問演奏等で弾いているうちに、歌謡曲、タンゴ、ポップスとジャンルは大巾に広がって行きました。どうやら音楽にはジャンルの垣根は無いようです。

毎日元気で好きな音楽を楽しめるのは岡村さんのシニアアンサンブルへの並々ならぬ情熱とご指導、そして皆様のご支援のお陰と感謝しています。